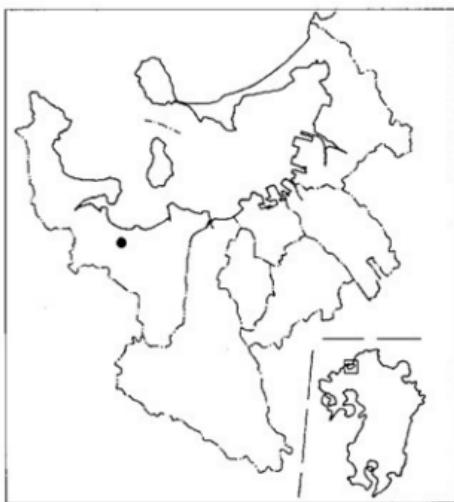


OO TUKA
大塚 遺跡

—第7次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第256集



1 9 9 1

福岡市教育委員会

一序一

本市西区の今津湾馬辺は都市近郊の風光明媚な田園地帯であります。近年国道202号線バイパスの延伸に伴う道路網の整備により、一帯の開発・宅地化が進んでおります。反面、これに伴って消滅していく遺跡も増加しており、本市でも矢なわれていく遺跡への対応が大きな課題となっております。

今回の大塚遺跡第7次調査も民間の宅地造成に伴うもので、中世を中心とした集落が検出され、今宿平野での中世村落の実態を把握する上で重要な成果を得ることができました。

この報告書が文化財に対するご理解の一助となりますとともに学術的にも活用されれば幸いです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

一例言一

1. 本報告書は東栄ホーム株式会社による分譲住宅造成に伴って行なわれた大塚遺跡の第7次調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は磁北である。
3. 遺構の呼称は略号化し、土壙→S K・井戸→S E・掘立柱建物→S B・柵列→S A・溝→S Dとし遺構番号は通し番号とした。
4. 本書に使用した実測図は、加藤良彦・黒田和生・英豪之・溝口武司・平川敬治による。
5. 本書の執筆・編集は加藤が行なった。
6. 本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

一本文目次一

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	3
III. 調査の記録	5
IV. おわりに	8

I. はじめに

1. 調査に到る経緯

今回の調査は昭和63年12月、福岡市西区今宿字大塚334番1地内において地主より分譲住宅造成に伴う売買の計画が持ち上がり、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に遺跡の有無の照会がなされた事に始まる。受付番号は教埋63-2-440である。

埋蔵文化財課では周知の遺跡内（大塚遺跡）である事を確認、同年12月13日に試掘調査を実施し、表上下35cmの基盤層上で柱穴多数と溝状遺構を検出した。

この後、地主と株式会社東栄ホームとの売買契約が成立、計画が具体化したため、現状での保存を巡り本課と協議を重ねた結果、遺構面に掘削が及ぶ車庫部分に関して、本課が記録保存のため緊急発掘調査を行なう事となった。

調査は平成元年8月30日より同年9月26日まで行なわれた。調査面積は133.7m²である。

尚、調査に際し、株式会社東栄ホームには多大な御理解と御協力を賜わった。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	8944	遺跡略号	OTK-7
調査地地籍	西区今宿字大塚334番1	分布地図番号	112
開発面積	634m ²	調査実施面積	133.7m ²
調査期間	890830~890926	事前審査番号	63-2-440

2. 調査の組織

調査委託：株式会社東栄ホーム

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（当時）

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財課第2係長 柳沢一男

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 安倍 徹（当時）

調査担当：埋蔵文化財課第2係 加藤良彦

調査協力：有富滋子 平井和子 後藤ミサヲ 緒方マサヨ 吉岡田鶴子 山田サヨ子

宮原邦江 吉村哲美 黒田和生 英豪之 溝口武司

資料整理：平川敬治（九州大学） 池田初実 国武真理子 雅田慧 小城信子 木村厚子

橋崎多佳子 能美須賀子



图8.1 因迈森特分布图(1/25,000)

- | | | | |
|---------------|--------------|--------------|---------------|
| 1. 本調查在地點 | 2. 大墩遺跡 | 33. 鹿崎遺跡 | 4. 背木遺跡群 |
| 5. 今宿五郎江遺跡 | 6. 女原芝掛遺跡 | 77. 女城遺跡 | 8. 滾水流跡 1 区 |
| 9. 德永溝跡 2 区 | 10. 德永溝跡 3 区 | 11. 德永溝跡 4 区 | 12. 蓮町遺跡 |
| 13. 斎氏引地遺跡 | 14. 鹿崎古墳 | 15. 今宿大冢古墳 | 16. 谷上 B 1 号墳 |
| 17. 女原 C 14号墳 | 18. 山ノ鼻 1 号墳 | 19. 山ノ鼻 2 号墳 | 20. 若八尚古墳 |
| 21. 卜谷古墳 | 22. 丸隈山古墳 | 23. 新闘室社 | 24. 今宿遺跡群 |
| 25. 穗遺跡 | | | |

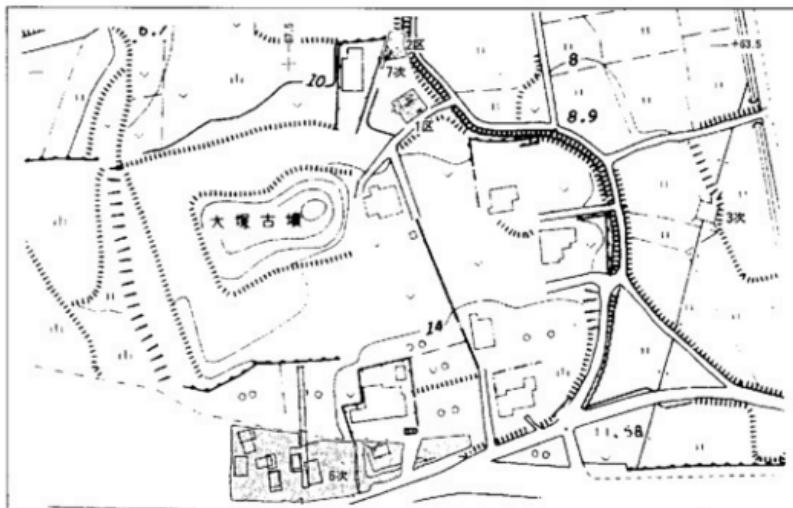


Fig. 2 威音区位图(1/2,000)

II. 遺跡の立地と環境

本遺跡は糸島平野の北東部、北を横浜・今宿の砂丘に、東を叶岳・長垂山塊に、南を高祖山麓に、西を瑞梅寺川河口に限られた東西6km南北2km程の狭隘な今宿平野に位置する。大塚遺跡はこの平野の高祖山麓東北部、北へ長く伸びる低丘陵の先端近くに立地する。

縄文時代の遺跡は後期の埋葬を高祖山北西山麓の扇状地上の周船寺遺跡群・飯氏遺跡群で、周船寺遺跡群では竪穴住居址様の遺構も検出されている。夜臼式期の遺物は周船寺遺跡群と大塚遺跡から検出されている。

弥生時代は北西端の今山遺跡で前期末に始まる石斧製作址、これから南東に延びる古砂丘上の今宿遺跡群では前期末から中期を中心とする甕棺墓等の墓地群が広がり、土壙墓から細形銅劍と硬玉製勾玉が検出されている。高祖山麓の低丘陵・扇状地上にも遺跡は広がり、周船寺遺跡群・飯氏遺跡群で前期の甕棺群を検出、中期には周船寺・飯氏・今宿五郎江・青木遺跡で集落を、飯氏では中期中頃から後半の2列埋葬の甕棺墓が検出されている。後期では飯氏・大塚・今宿五郎江・青木遺跡で集落を検出し、特に今宿五郎江遺跡では中期後半から後期にかけての掘立柱建物群を中心とする環濠集落が検出されており、溝からは多量の土器に混じって小銅鐸が出土している。また飯氏遺跡群では後期中頃から後半の甕棺・石棺内から長宜子孫内行花文鏡・仿製内行花文鏡を検出している。

終末期から占墳時代にかけては飯氏・蓮町・徳永・女原・大塚・今宿五郎江遺跡で集落が検出され、また同じ地域内に東西4kmにわたって若八幡宮・鋤崎・丸隈山・今宿大塚古墳等の8基の前方後円墳が4世紀中頃から6世紀後半にかけて営々と築かれ、これらよりさらに山麓側には谷上B1号墳や女原C14号墳等の4基の小型前方後円墳を含む13~15群300基以上の後期群集墳が分布している。新聞古墳群C群中に第I型式の須恵器を検出する新聞窯跡が有る。砂丘上の今宿遺跡群からは布留式併行期の製塩土器と土鍤を多量に検出、蓮町遺跡群からも多量の

土鍤を検出している。

古代は徳永遺跡群での越州窯系青磁・刑窯白磁・長沙窯系水注等約200点と綠釉陶器・玄海灘式製塩土器・鐵津等を検出しており「主船司」との関連も考えられている。

中世の集落は蓮町・徳永・大塚・五郎江・青木遺跡群で検出され、他に飯氏・青木で土壙墓が、



Fig.3 今宿大塚・調査区遺跡(南から)



Fig.4 1区 遺構全体図(1/200)



Fig.5 2区 遺構全体図(1/200)



Fig.6 1区 全景(西から)

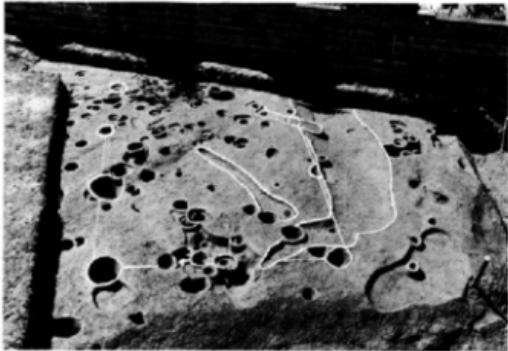


Fig.7 2区 全景(東から)

女原で水田址が検出されている。砂丘上では今津地区の長浜海岸部に建治2年（1276年）に築かれた元寇防壁が最も良好な状況で残っている。東・西・中央の3区间で石材・工法が違つており、普請分担のあらわれと理解されている。

III. 調査の記録

調査の概要

本調査区は大塚古墳の北東約30m程に位置し、標高9.6mを測かる。

現状は畑地で、表土下30~50cmで赤褐色粘土の遺構面に達する。耕作による掘削が深く包含層は残っておらず、遺構の残存状態も良くない。客土を施して4戸分の分譲住宅を造成するため、削平を受ける車庫部分の調査となり、南側77.2m²を1区北側56.5m²を2区とした。

検出した主な遺構は、中世の土壙1基・溝4条・掘立柱建物4棟・柵列4列である。

遺物は縄文時代から中世まで少量ずつ検出しており、総量でコンテナ1箱分である。

土壙SK04 (Fig.8)

1区中央部西端で検出され、主軸をほぼ東西方向にとる隅丸方形で2.32×2.08×1.0mを測かる。断面は逆台形で底面は平坦である。土層は最下層の暗黄褐色土が自然堆積で、以上は暗灰褐色土に地山土ブロックを含む客土である。出土遺物は、瓦質の擂鉢(Fig.16~11)の他、14~15世紀代の龍泉窯系青磁碗・土師皿等を検出している。

井戸SE05 (Fig.9)

SK04の1m程北側に位置する。1.45×1.20×2.50mの掘方内に石組で井筒が構築されている。

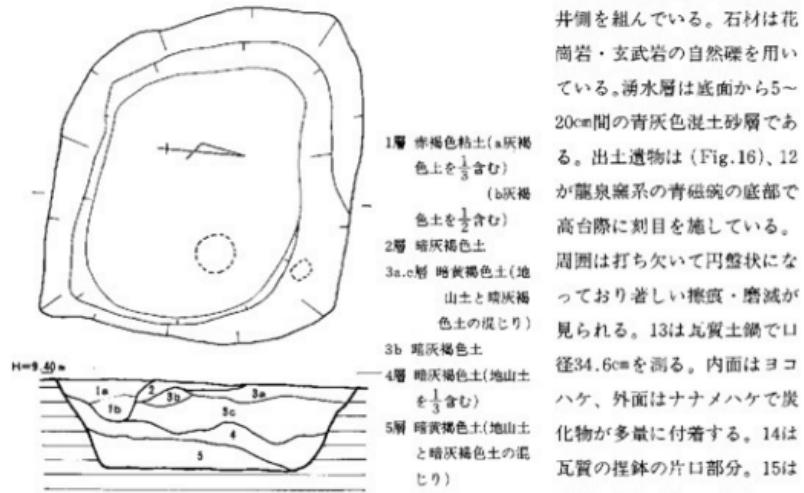


Fig.8 SK04 実測図(1/40)

底面に石を敷き、この上から井筒を組んでいる。石材は花崗岩・玄武岩の自然礫を用いている。湧水層は底面から5~20cm間の青灰色混土砂層である。出土遺物は(Fig.16)、12が龍泉窯系の青磁碗の底部で高台際に刻目を施している。周囲は打ち欠いて円盤状になっており著しい擦痕・磨滅が見られる。13は瓦質土鍋で口径34.6cmを測る。内面はヨコハケ、外表面はナナメハケで炭化物が多量に付着する。14は瓦質の擂鉢の片口部分。15は木製の独楽と思われ、全高5.8cm

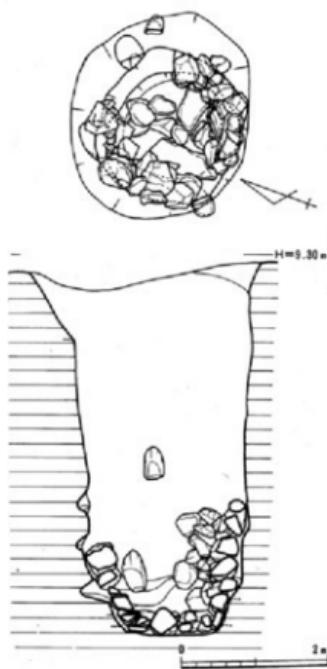


Fig.9 SE05実測図(1/40)



Fig.10 SE05(北から)

径3.6cmを測かる。ロクロ挽きでなく刀子等の手持ちの削りで成形され、体部上半には横向方向の擦痕が見受けられる。上部の中心に $0.4 \times 0.35 \times 2.3$ cmの方柱状の鉄芯が打ち込まれ、下半の円錐部には黒漆状の塗料が塗られている。5・6は円筒埴輪片で5で最大径28.2cm、6で28.8cmを測かる。色調は浅黄橙色で似るが、5は胎土に多量の石英粒を含み、外面は粗いタテハケ、内面はヨコケズリ、6は胎土は精良で器壁も厚目、外面はやや粗いタテハケ、小振りな透孔と、胎土・成形とも異なっている。ともに摩滅が著しいが、大塚古墳を飾ったものと思われる。他に瓦質擂鉢、土師質火舍・曲物等が出土している。

掘立柱建物

S B07 (Fig.11) 1区北東部に有り、端部が調査区外に有るため規模を明確にし得ないが、2間+ α ×2間+ α で方位をN-70°-Eにとる。柱痕跡は20~25cm掘方は30~40cm。S B08とS D03に切られる。

S B08 (Fig.12) 1区北西部に有り、2間(1.95m)×2間(1.80m)を測かり、方位をN-72°-Eにとる柱は径20cm程であるが、掘方はやや大きく40~65cmを測かる。S B07と同方位をとりながら重複しており、これを切っている。

S B09 (Fig.14) 1区南端に有り、南端部が調査区外のため不明であるが、少なくとも3面の廊を有する建物と思われる。方位をN-50°-Eにとり、内陣で2間(3.55m)、廊で2間(4.05m)を測かる。掘方は小さく20cm程である。底は地形に沿って傾斜している。

S B10 (Fig.13) 2区中央に有り、桁行3間(5.65m)×梁行2間(3.85m)を測かる。方位をN-84°-Wにとる。柱は15cm程であるが底は深く60~80cmを測かる。

柱穴内より土師質の擂鉢・土師器環等を検出している。S D06がこれに並行している。屈曲部が建物下部に入り込むが、関連する遺構と考えられる。

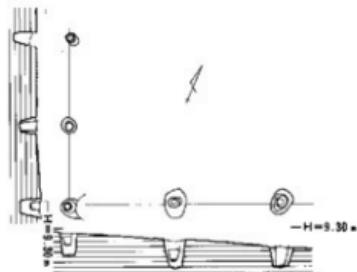


Fig.11 SB07実測図(1/100)

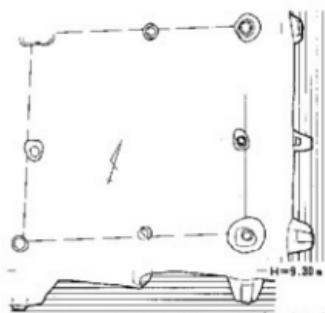


Fig.12 SB08実測図(1/100)

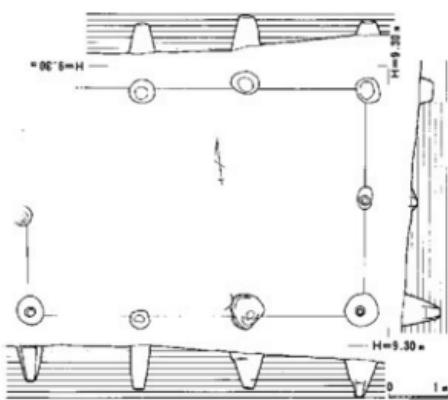


Fig.13 SB10実測図(1/100)

柵列と溝 (Fig.15)

1区北半部で東西方向に横断する様に3条の溝 S D01・02・03と4列の柵列 S A11・12・13・14を検出している。方位はいずれもN-78°~79°-E。

後世の耕作による削平で残りは不良だが、溝は2mの等間隔で、幅0.5~1.2m、深さ20cm程度である。覆土は暗灰褐色土。出土遺物 (Fig.16) は03からの出土で7が白磁皿で高台径7.0cm、疊付部の釉は山形にカキ取られる。16世紀代。8は李朝粉粧の碗で灰色の胎土に白色土を横に掃き透明釉を施す。同じく16世紀代。9は足蓋の脚で瓦質。10は土師質の火舎で、口径30.4cmを測かる。内面はヨコ・ナナメハケ、外面は2条の突帯間に菊花文のスタンプを施す。これはS K04・S E05に同個体が検出されており、大きな時期差は無いと思われる。

柵列 S A11は S D03の中央に、S A12~14は S D02の南際に設けられ、2回建て替えたものであろう。柱径は10~12cm程度で柱間は1.8~2.3mを測かる。

その他の遺物 (Fig.16) 1は白色チャート製の石鉄で縦方向に研磨が見られる。2は表土出土

の弥生土器底底部、前期末。3は土師器脚付鉢の脚部。古墳時代前期。4は土師器鉢で口径18.4cm。石英粒を多く含む。脚が付く可能性もある。古墳前期。16は瓦質の足蓋で口径22.2cm、16世紀代。17は土師質の湯釜でS P44出

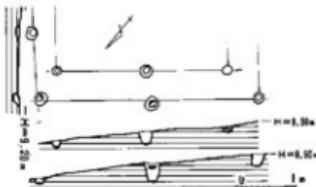


Fig.14 SB09実測図(1/100)

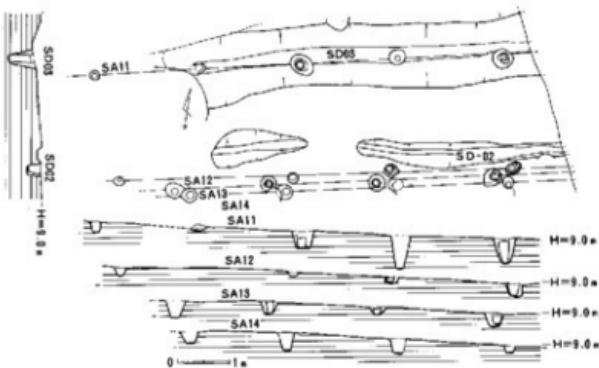


Fig. 15 SA・SD実測図(1/100)

IV. お わ り に

遺物は縄文時代から中世まで検出しているが、主要是16世紀代で明確な遺構に伴うものも16世紀代の中世のみである。SK・SEも掘立柱建物、溝・柵列はそれぞれ切り合い関係に有るが、覆土に大差なく、また同個体の遺物を検出している事から大きな時期幅は無いと思われる。大まかな流れでは一部の掘立柱建物とSE・SK→掘立柱建物→溝・柵列となる。

掘立柱建物は方位をN-84°-WのSB10、N-70°-72°-EのSB07・08と、N-50°-EのSB09の3群に分かれる。SE・SKの並列方向はSB10に近く、またSB08との切り合いからこれらはSB10グループに属するものと考えられ、この後SB07→SB08と建築され、さらに、柵列が設かれている。SB07・08の方位は大塚古墳の主軸と一致する。建物の方向が東西方向に近いのは青木1次、大塚6次調査でも確認されており、この地域の中世後半の傾向と思われる。

溝・柵列は3重の溝と2種の柵列という厳重さ、16世紀という時期から戦国期の社会情勢に対応したものと思われ防護用に設けられたものであろう。調査地が丘陵の北東際であるため、関連する建物は南西側に広がると思われる。溝・柵列の方位は大塚古墳北側外堤の延長線上外側に並行しており、これを内側に取り込んでいる可能性も有る。

長雨の中、苦労した調査であったが、範囲の割に大きな成果が得られた。

土。口径12.8cmを測かり、体部下半には煤が付着する。
16世紀代。18は土師器脚付壺の脚部で4とは別個体。
19は土師器壺でSP40出土。口径11.6cm、器高2.4cmを測かる。摩滅が著しく調整不明。14~15世紀代。

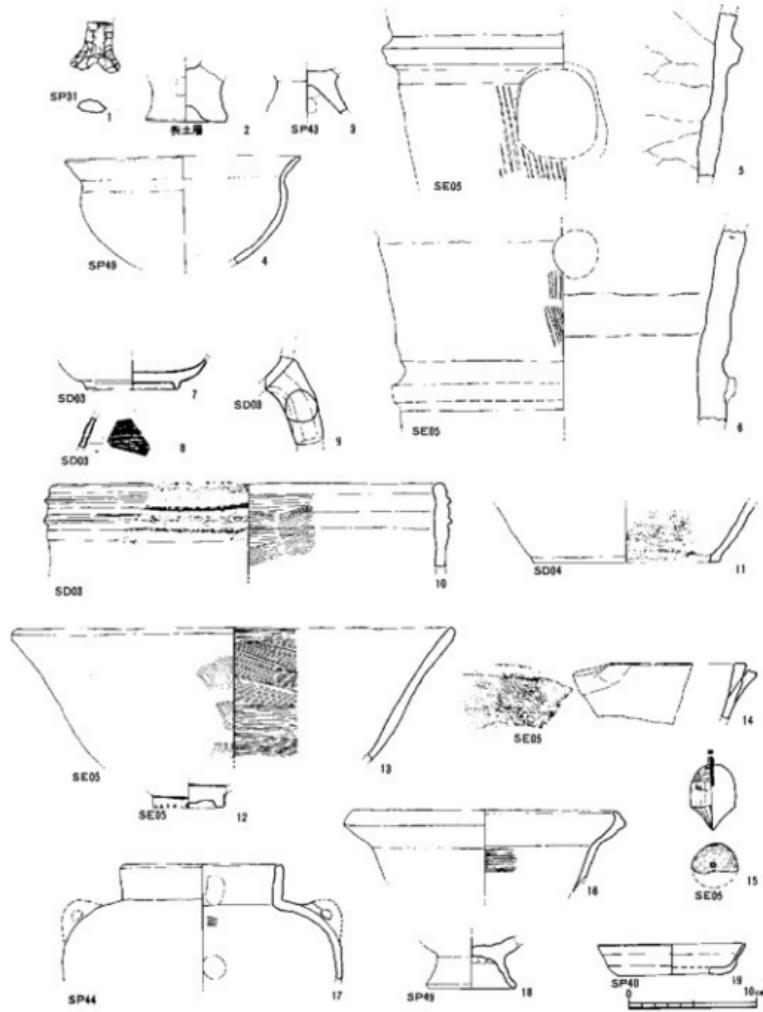


Fig. 16 遺物文例圖(1/4)

大塚遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第256集

1991年（平成3年）3月15日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 桑文社印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南4丁目15-17